

令和3年度第3回対馬市海岸漂着物対策推進協議会 議事録
(令和3年度対馬市海岸漂着物対策事業中間支援業務)

1. 会議日時：2022年（令和4年）1月19日（水）14:30～17:00
2. 会議場所：対馬グランドホテル 2階 パーティー会場会場
3. 出席者：

委員 (会場参加)	糸山委員長、犬束委員、山下委員、二宮照幸委員、平川委員、森委員(順不同)
委員 (オンライン参加)	清野委員、中山委員、小島委員、吉原委員
事務局	【対馬市市民生活部環境政策課】 舎利倉政司課長、安藤智教課長補佐
運営	【一般社団法人対馬CAPP(以下、CAPPと略す)】 上野芳喜、末永通尚、吉野志帆、松井秀明、原田昭彦、俵理奈、佐々木達也

(欠席：川口委員、二宮昌彦委員、島谷委員、大庭委員、宮田委員)

1. 議事録

注：

- ・ 「※」はWebでのオンライン会議参加者を、無印は会場参加者を示す。
- ・ 「えー、あの、えっと」などの文脈において意味をなさない単語、および、言い直した発言については記載していない。明らかな間違いのある発言や口語表現については、適宜修正している。
- ・ 発音が不明瞭なため聞き取りづらい言葉、解釈が必要な言葉、漢字に変換する際に確認が必要な部分については、青色文字で示している場合がある。また、「さん」「様」などの敬語は適宜省略している。
- ・ 発言者は赤文字で示し、発言の補足は（かっこ書き）にて示している。
- ・ 質問時の委員の挙手動作およびそれに伴う委員長の指名発言は、議事録修正時に削除している。
- ・ 発言の趣旨が変わらない程度に、適宜語順を入れ替えている。

事務局（安藤）：定刻になりましたので、ただ今から、第3回対馬市海岸漂着物対策推進協議会を始めさせていただきます。まず開会にあたりまして、対馬市環境政策課課長の舎利倉が一言挨拶を申し上げます。

事務局（舎利倉）：皆さまこんにちは。本日は市民生活部の二宮が別件で会議があります。（私が）代理出席させていただきます。前回は別件がございまして欠席しまして申し訳ございません。本日も皆さまにおかれましては、このコロナ拡大の中お集まりいた

だきましてありがとうございます。そういう状況でございますので、こういう形でオンラインという事で会議を進めさせていただきたいと思っております。本日は今年度の取り組みと実績報告も踏まえまして皆様にご議論いただければと思っております。よろしくお願い申し上げます。

事務局（安藤）：続きまして、糸山委員長、一言お願いいたします。

糸山委員長：どうも皆さん、こんにちは。今年度第3回という事ですけど、皆さんとこうやってオンラインも含めて、一堂に出会って話をするという事がなかなかありませんので、その点では、貴重な機会ではないのかなという気がしています。ここで第3回目、令和3年度の一番最後の会議になりますので、色々な意味で今年1年、令和3年度にどういう事ができて、どういう事ができなかったのか、課題として残ったのかと。そういう事がもう少し明確になっていけばいいのかなという風に思っています。とにかく皆さんと協議を重ねられればそれでいいのかなと思っておりますので、皆さんよろしくお願い申し上げます。

事務局（安藤）：ありがとうございました。では議事の方に入りたいと思っております。議事を委員長お願いします。

糸山委員長：それでは、議事を進めていきたいと思っております。まず(1)「令和3年度第2回協議会の振り返り」について資料1でございます。よろしくお願い申し上げます。

運営（末永）：事務局から発表をさせていただきたいと思っております。資料1 令和3年度第2回協議会の議事要約という部分をご覧ください。この中で、今回は参考資料1から5とつけまして、ボリュームが大きいページ数になっておりますので、参考資料につきましては的確に短く話をします。議事が終わった後でも結構ですので、(時間の)空いた時でもゆっくりご確認くださいと思います。関係ある参考資料につきましては、随時触れていきますが、(画面に)映したりする事はありません。では、議事の振り返りという事で、まず、第1回協議会の振り返りの中で、二宮昌彦委員の方から「流木は野積みして腐らせて自然に帰すという事はできないのか。その方が回収コストも無くなって良い気がする。」という様なご意見をいただきました。それから、それについての回答という事で、山下委員より「流木を有価物とみなすか廃棄物とみなすかで違って来るが、廃棄物の場合は適切な管理をすることになっているので、放置することは問題がある。」という様なご発言をいただいております。それにつきまして、壱岐の方、同じような担当課であります壱岐市環境政策課環境衛生班の松尾様に壱岐の場合の状況についての問い合わせをしたところ、参考資料4にある通りのメールが返って参りまして、「長崎県海岸漂着物等地域対策推進事業を活用して合併前の旧4町単位で入札を行い、海岸漂着物の回収・運

搬・処理業務を業者に委託しております。限られた予算内において漂着ごみの影響を考えた場合、自然物よりも人工物である廃プラスチック類や発泡スチロール等を優先的に回収・処理せざるを得ない状況です。ご指摘の木材については、積極的には回収対象外としておりますが、波の影響を受けない場所へ集積したり、地元の海女さんが暖を取ったり、キャンプファイヤーの材料として再利用しているケース等もあります。なお、今後、景観の悪化や大量に漂着する場合等も想定されますので、木材等の回収・処理について研究していきたいと考えています。」という事でご回答をいただいています。それから、海ごみ情報センターが発信する情報の確認で、糸山委員長より「トランクミュージアムの内容というのは少しずつ変わっているのか。」というようなご質問がございまして、回答として、「年齢層や知識に応じてトランクミュージアムの授業の内容をブラッシュアップして新しいものになっている。」という事で回答させていただきました。それから、ステークホルダーとの連携について、これにつきましては、二宮（昌彦）委員より「島外の企業が海岸漂着物を使ってごみ袋や買い物かごを作って販売したお金を対馬に寄付してくれている。そういった企業もステークホルダーの資料に載せて連携を深めていければ良いと思う。」といったご意見をいただいております。次の資料におきましては、伊藤忠商事様ですとか、ファミリーマート様、ASKUL様等をステークホルダーの中に入れていきたいと思っております。次が、対馬市海岸漂着物対策推進行動計画の体制作りの実施状況の確認と評価につきまして、小島委員から「今現在、しばらくはコロナの影響で全員で対面する形が難しいという状態になっているが、いずれ落ち着いた時に年に一度でいいので現場に行く日程を設定していただきたい。」というご意見をいただきました。そこで回答といたしまして、「できることならそうしたいと思っている。ペレット化装置も入れて、今後破砕機も入れる。その稼働しているところをぜひ皆さんには見ていただきたいと思いつつ、コロナが落ち着くのを今待っている状況なので、今しばらくお待ちください。」という回答をさせていただきました。それから、対馬市にSDGS推進室ができて、環境スタディツアー等が進んでいるという様な報告を受けまして、犬束委員の方からご意見で「うちの会社の方でこの前環境スタディツアーみたいなことを2回行った。その中で磯焼けや磯焼けの原因であるガンガゼと一緒に漂着ごみを見てもらった。」そういったスタディツアーに取り組んでいるという事でご報告、ご意見をいただきました。それにつきまして補足のご意見として川口委員から「実は今、グリーン・ブルー・ツーリズムの方で修学旅行の受け入れ体制づくりを進めていて、漂着ごみを中心とした海の問題というのは、かなり重要なコンテンツの1つに位置付けている。」というような報告を受けております。それに付随しまして、川口委員の方からご意見として「教育旅行としてこの海ごみのテーマを扱おうとした時に、事前学習をしたいという学校はすごく多い。」という事で、その具体的な事としまして、CAPPAが継続的にモニタリングしてきた結果みたいなものでありますとか、対馬市の漂着ごみに関する政策とか、そういったところの情報がこのページだったら載っていますから勉強してくださいねという事で載っている様なページがあると紹介が

しやすいという様なご意見をいただきました。次に韓国、中国との連携について二宮（昌彦）委員から「対馬には韓国や中国のごみが多いが、国レベルでそういった話というのはされていないのか。」といったご質問がございまして、対馬市の二宮（照幸）委員より「国同士の海ごみの削減ということで、その1つとして海洋プラスチックごみのゼロ宣言というのが2019年に大阪でされている。対馬の漂着ごみ、漂流ごみは国から補助金をいただき回収事業を実施している。国が全くしてないということではございません。」ということでご回答をいただいています。小島委員の方から補足ということで「日本と韓国と中国の環境大臣会合というのが毎年開催されていて、その時に海洋ごみの問題は必ず議題に入っている。個別の対馬の現状に対してどうかというのを国同士で話し合うというのは、ほとんど行われていないと思う。」それから、それにつきまして糸山委員長の方から、「例えば同じ水産業に携わる人たちが直に会って話をするという方が、もっと解決に近くなるということですね。」という問い合わせがありまして、回答として「もし漁業者同士の交流の機会がすでにあれば、海洋ごみについても情報交換ができると良いと思う。」というご意見をいただきました。それからその補足といたしまして、二宮（照幸）委員から「韓国の漁業者との対話という部分をもし計画する場合、市役所の観光交流商工部の方にご相談をいただければ国際交流協会の出先機関に釜山事務所というものもございまして、韓国、特に釜山の団体を探したりするお手伝いはできると思う。」というような補足のご説明をいただきました。それから川口委員からのご質問がございましてアダプト制度についてよく分からないので教えてほしいということで、アダプト制度について県の制度で登録しているボランティア団体には飲み物とかチェーンソー、それから燃料などの補助が出たり、ボランティア保険についての加入の窓口を提供している制度があるということでご説明をさせていただきまして、それについて川口委員からの質問で「お金をいただいて実施するツアーでアダプト制度が適用できるのか。」というご質問がございまして、今回代理でご出席していただいていた、森委員様の代理の平間様の方で、「アダプト制度を使った保険の適用だったり、物品の支給だったりとかいうのはCAPPAが中間になってやられると思いますので、軍手とかごみ袋とかの支給はおそらくできるのではないかと考えておりますが、有料のツアーになってくると個別の案件になってくるので河川課とも協議をしていきながら回答したい。」というふうにご回答いただいております。資料1の振返りについての議事要約の説明については終わります。

糸山委員長：まずは資料1の振返りについて今ご説明がありました。今の説明で何かご意見、もしくはご質問等はございませぬでしょうか？よろしいでしょうか？ではその次いきたいと思います。資料2になります。対馬市の普及啓発活動の取組みについてです。よろしく願います。

運営（松井）：はい。資料2では対馬市の普及啓発活動の取組みについてお話をしていた

できます。まず1つ目のトランクミュージアム。トランクミュージアムは、トランクの中に対馬の海ごみが展示してあってどこでも海ごみが学べる教材です。こちらの貸出し、運営を対馬市から委託を受けて、対馬 CAPPА が行なっております。今年度の貸出し件数は30件となっております。内訳は小学校が8件、企業が4件、学童が4件、大学が3件、メディアが3件、展示が3件、高校が2件、中学校が2件、団体が1件と、幅広い場面で使用されています。今年度、多くの対馬市の小学校が島内で修学旅行を行いました。その修学旅行の中で、対馬 CAPPА はトランクミュージアムを使った海ごみ授業とシーカヤック体験を行いました。生徒と先生どちらからも海ごみが学べて自然を体験できるセットがとても好評でした。それと、対馬の海ごみに興味を持った企業や大学、メディアなどが対馬に多く訪れました。そういう方達にもこちらのトランクミュージアムを使用して海ごみの現状について説明させていただきました。トランクミュージアム自体は小学生が理解できるぐらい簡単な内容なのですが、対象者の年齢や知識に応じて説明する内容を変えています。続きまして、ボランティア海岸清掃。今年度から対馬市はボランティア受入れ窓口を設置しました。ボランティア受入れ窓口の運営も対馬 CAPPА が行なっております。今年度はボランティアが13件行われました。内訳は、企業が3件、大学が3件、高校が2件、中学校が2件、小学校が1件、団体が2件となっております。企業の九州電力さんとは豊玉発電所の前の清掃を2回行ないました。大学では、長崎大学のながさき海援隊というボランティアサークルが対馬に訪れ、2日間で3か所の海岸を清掃しました。対馬高校は、ユネスコスクール部と商業経済部の生徒達と2回海岸清掃を行いました。大船越中、鶏知中、巖原小は学校の近くの海岸を一緒に清掃しました。最後の団体のエムフィッシャーを化学総連は島外からの団体で、化学総連は化学メーカーの労働組合です。こちらの化学総連は、毎年対馬に訪れて海岸清掃をしてくれています。ボランティア受入れ窓口の認知度があまり高くなく、あまり広まっていないので、来年度以降はもっと対馬で海岸清掃をしたい人達に広まるように広報していきたいと思えます。続きまして、海ごみ関係イベントです。今年度対馬市では2件の海ごみ関係イベントが行われました。1つ目が、スポ GOMI IN NAGASAKI 対馬。NIB 主催で、対馬市の協力のもと、10月10日、井口浜海水浴場でごみ拾いを競技に変換したスポ GOMI が開催され、合計27チーム、120名が参加しました。スポ GOMI はあらかじめ定められたエリアで制限時間内にチームでごみを拾い、ごみの量でポイントを競い合うスポーツで、合計28㎡のごみを回収しました。このスポ GOMI には、豊玉高校の全校生徒が参加するなど、若い参加者が目立ちました。このスポ GOMI は若い人たちが海ごみに興味を持つ良いきっかけになったと思えます。2つ目は、日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップです。こちらは11月7日に対馬高校、豊玉高校、長崎大学、釜山外国語大学の52名の学生が、オンラインで対馬の海ごみ解決に向けたディスカッションを行いました。こちらの詳しい説明は、資料3で行なわせていただきます。次のページに参ります。こちら、海ごみ情報センターです。この海ごみ情報センターも対馬市の委託を受けて、対馬 CAPPА が運営を行なっております。

す。今年度記事を21件上げまして、主にボランティア清掃やトランクミュージアムを使った海ごみ授業の活動報告などを行っていますが、前回、川口委員からも事前学習ができるようなものがほしいというようなことで、前（プロジェクター）に掲載している対馬市の漂着ごみ回収データなど、こういう海ごみの詳細なデータなどが分かる記事も載せております。他にも、海岸に漂着して来たペットボトルについて詳しく書いた記事など、対馬の海ごみについて学べる記事もこれからアップしていこうと思っております。続きましてSNS。こちらは対馬CAPPAが独自で行なっているものなのですが、1つ目にfacebook。こちらは美しい対馬の海ネットワークという対馬CAPPAの前身団体の名前で今の対馬CAPPAの活動情報を公開しております。2つ目はInstagramで、こちらは昨年11月に開設しました。発信内容としましては、対馬の海岸の状況の写真などや、ボランティア清掃の様子などを掲載しております。今から動画を流すんですが、こちらは、去年流した実験動画です。ポリタンクの中に水を満杯に入れて海に浮かせた場合、沈むのか浮くのかという実験をしました。ポリタンクに水を満杯に入れても海に沈みませんでした。このことから、韓国からたくさんのポリタンクが流れてきているのにも納得がいきます。このような対馬の海ごみの現状を広く色んな人に伝えるためにSNSを活用していきたいと思えます。続きまして環境スタディツアーです。こちらでも対馬CAPPAが行なっているもので、対馬の漂着ごみの現状を学ぶ海岸視察と、美しい自然を体感するシーカヤックをセットにしたツアーを計画しております。昨年度は島内修学旅行が7件、企業ツアーが1件、高校が1件、修学旅行視察ツアーが1件、合計10件の環境スタディツアーを行ないました。3月には企業のツアーと修学旅行の受入れを予定していて、今後もこのような環境スタディツアーの受入れを拡大していこうと思っております。最後のページに、こちら昨年作った普及啓発計画の表になります。こちらを見ていただくとだいたい目標件数に達しているんですが、1つだけ漁協での海ごみ対策の説明、協力要請というのが1回もできておらず、モニタリング調査やボランティア清掃などで漁協への理解を得るのは不可欠なので、来年以降漁協に説明や協力要請をしていきたいと思っております。以上で資料2の説明を終わらせていただきます。

糸山委員長：はいどうもありがとうございます。今の対馬市の普及啓発活動の取組みでトランクミュージアム以下ボランティア海岸清掃海ごみ関係イベント等色々説明がありましたけども、何か質問等ございませんか？結構おもしろいものもあったように思いましたけども。よろしいでしょうか？

中山委員：すみません。九州大学の中山です。

糸山委員長：はいどうぞ。

中山委員：非常に丁寧なご説明ありがとうございました。こういった取組み自体も進めることは非常に重要なことだと思いますし、この取組みを日本の同じ様に困っているところに共有するっていうことも重要だと思います。今、プラスチックスマートっていうホームページがあって、色んな自治体とか民間企業が自分の取組みを共有しているサイトがあって、対馬市さんも、海岸清掃事業のことは、日韓ビーチクリーンアップとか、それは登録されているんですけど、他にも色んな取組みがあっっているようですので、そういうところに登録して他の人に情報共有していただければなというのが1点と、これは学会関連のお願いなんですけど、今年の9月に宮崎大学で、廃棄物資源循環学会が開催されます。九州ですので、我々もその企画運営に携わっているんですけど、ぜひそういう場でこの取組内容の情報発信をしていただきたいと思っています。具体的な話はまた後で事務局さんにもお話させていただきたいと思うんですが、ぜひそういうこの素晴らしい取組みを全国の皆さんにもっと情報発信するようなところに力を入れていただければ大変ありがたいと思います。以上です。

糸山委員長：はいどうもありがとうございます。今の質問について、事務局から何かお答えすることありませんか？

運営（松井）：ぜひ、学会の方に参加して、情報発信したいと思います。

糸山委員長：どうもありがとうございます。CAPPAとしては何かないですか？

運営（上野）：海岸清掃や調査の他に、やはり大事なのが普及啓発だと思います。漂着ごみの削減の普及啓発ですね。その為に今の海岸の現状を知ってもらうと同時に、やっぱりこの対馬の豊かな自然をまず知ってもらうことも大事なことではないかと思っています。島内に観光に来られた方々や、地元で生まれ育った人達にも、元々は本当に自然が豊かで、全くごみがないような海があるんだということも知ってもらう。ただ漂着ごみの現状をダークなイメージだけではなく、元々古里は綺麗だったんだということを知ってもらう為に海遊びとといいますか、マリレジャー、カヤックは大切だということは思っています。それと、浅茅湾という、風光明媚な古代の景色と全く変わらないようなところで、そういう遊びをしてもらって、漂着ごみのギャップを体験してもらうことが大事ではないかと。昨年と一昨年、たまたまこのコロナ禍で、島内のほとんどの小学生が島外の修学旅行に行けなくて島内を廻ることになって、がっかりはしたそうなんですけど、その中でも楽しみにしてくれたのがシーカヤックで、そのシーカヤックと組合わせてトランクミュージアムの説明をさせていただいたところ、今回たまたまそういう形になったと思うんですが、非常に後からいただいたお手紙とか感想文を聞きますと、やっぱり子ども達の心の中に、浅茅湾の素晴らしさ、シーカヤックの面白さと漂着ごみの問題を掲げてもらって、僕らもやりがいのある状態になっている今なんですけど、全く別の話で、私自身がもう十何年、シーカヤックという体験をやっ

ている中で、それまで中学生を十何年間ずっと乗せてきたんですが、その子供たちが成人になったり社会人になったりして、帰って来た時に（友達に）自慢したいというか、浅茅湾にシーカヤックをっていう形で乗りに来だしてくれたんですね。その当時、種を蒔いていたのが段々芽になってきたというか、浅茅湾というのを自慢にしてくれて、古里自体の素晴らしさを知っていきながら、漂着ごみのことを小中高と把握してもらって向こう（島外）に行ってもらえば、尚さら普及啓発も進んでいくと思います。昨年、SDGS 推進都市になって、17の目標の内の14の海の豊かさを守ろうの中で推進していく時に、教育委員会と推進本部と環境政策課が一丸となって、たまたまこういう形でシーカヤックを楽しんでもらって、環境教育、スタディツアーをやらせてもらったんですが、あと10年、2030年までこれを続けてもらったらもっと素晴らしい活動になると思いますので、その辺よろしくお願いします。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。上野さん、いわゆる対馬 CAPPa としてまだいろんな形で情報発信が少し不足しているような感じがするんですけど。

運営（上野）：はい。糸山先生とか中山先生がおっしゃるように、まだまだ島内でさえ知られてないといえますか、そこは課題だと思っております。

糸山委員長：対馬市役所に情報発信をうんとやれというのは、ちょっと酷な感じもしますので、幸いなことに支援の組織がこうやってあるわけですから、対馬 CAPPa を中心にしてもう少し情報発信をちゃんとやっていけたら少し違うのではないかという感じはしますね。他ございませんか？よろしいでしょうか？それでは次に参りましょう。資料3、2021 日韓市民ビーチクリーンアップワークショップの報告書でございます。

運営（末永）：資料3について説明をさせていただきます。資料2の中でちょっとだけ触れました部分ですね。2021 日韓市民ビーチクリーンアップワークショップということで、資料をご覧ください。資料の1ページ目からです。去年、やっと開催はできたのですが、実は一昨年もこの日韓市民ビーチクリーンアップのワークショップの運営というのは、途中の計画までやろうとしていた段階で、新型コロナの島内の感染がクラスターとして発生しまして、一昨年は開催ができませんでした。今年度につきましては、昨年2021年11月7日（日）14時から対馬グランドホテル2階のパーティ会場、実は、ここにお越しいただいているこの場所で行われました。参加された方々につきましては、対馬島内の高校生が25名です。その内訳が対馬高校16名、豊玉高校6名、引率の先生が3名です。韓国側の参加者につきましては19名。釜山外国語大学の学生17名。これはオンラインによる接続になります。それから、釜山外国語大学の関係者が1名、それから講義をしていただきました韓国海洋大学の教授が1名ということで接続していただきました。それから、一般団体として、今回は長崎大学で海岸清掃等を行なっているながさき海援隊の学生に8名オンラ

インで接続をしていただきまして、海援隊の実際の活動の状況でありますとか、グループディスカッションをする際のファシリテーターとして各グループをまとめていただくことをお願いしました。2ページをご覧ください。接続の方法といたしましては、オンラインの接続ということで、今回、このようなハイブリット形式で、来場者とオンラインを繋いで会議を行っておりますが、これと全く同じ方法ですね。ZOOMを使用しまして接続を行いませんでした。3ページ目、実施する内容につきましては、海ごみに関する学習ということで、高校生の発表、それから海援隊の発表等もあったんですが、まず学習の部分といたしましては、韓国海洋大学校のチェ・ギョジョン教授より、韓国の海ごみの問題についてと世界的に見た状況についての講義を行なっていただきました。その中で、参考資料5というのを付けておりまして、先生の方に許可をいただいてその時に使った発表資料の方を添付しております。これは後でゆっくりご覧いただければと思います。韓国の海岸の状況ということで実際具体的に発表がありまして、中国の海洋ごみの74%、中国の海洋ごみが韓国にきてるのが74%に達しているという報告がその発表の中でなされました。そのような学習をした後にグループディスカッションということで、各学生がグループに分かれまして、それぞれのディスカッションというのをオンラインの中で行なっていただきました。そのディスカッションの内容につきましては、コロナ終息後に海ごみ問題解決に向けて一緒に取り組みたいことというのをテーマにさせていただきました。4ページに、日韓市民ビーチクリーンアップワークショップのプログラムというのが載っております。今説明しました韓国のチェ・ギョジョン教授の講演でありますとか海援隊の活動の紹介等行なわせていただいたんですが、通常は対馬の海ごみの紹介というところでは、従来でありますと対馬CAPPAがある程度取組みの状況でありますとか内容等をまとめて発表をしておりました。今回、CAPPA内で色々話をして、僕たちの団体というのは、もちろん海ごみ問題に取り組んで僕たちも活動を継続して行って、色んなところに繋いでいくということを目指して活動をしておりますが、次世代に対馬の海ごみ問題を繋いでいくということも1つ大切な要素だと思っておりまして、今回は、対馬の海ごみ問題の概要については、対馬高校のユネスコスクール部、それから商業経済部、そして国際交流課に発表をしてもらおうということになりました。その発表につきまして事前に活動をしようということになりまして、10月9日に高校生と私ども、それから、美津島漁協鴨居瀬支所の皆さまにご協力をいただいて、黒島にペットボトルの回収、及び調査等を行なうことができました。それについてVTRでまとめてございますので、そちらの方を今からご覧いただければと思います。(動画視聴)

事前に黒島の方に行きまして、ペットボトルを回収して来ました。船で運びまして、港の方で国別の分類というのを高校生の方に行なってもらいました。そういったものを元に、対馬の海ごみについての発表というのを行なっていただきました。通常は私どもCAPPAの方でやらせていただいていたんですけども、対馬高校といわず対馬にはまだ豊玉高校、上対馬高校もございますので、今後そういったところと連携しながら、もしくは中学校とも連携しながらこういった発表をやっていきたいと考えております。それで、先ほどの部分。コロナ

終息後に海ごみ問題解決に向けて一緒に取組みたいことということで、それぞれ分かれまして発表をしていただきました。資料9ページと10ページのところに参加者名簿が付いています。備考のところにあるんですが、韓国語検定が6級の生徒でありますとか、対馬高校の国際交流課の方。後は釜山外国語大学の方で、日本語の検定能力っていうことで、韓国語が堪能な日本の高校生、日本語の堪能な韓国の大学生ということで、バランスよく配置をしました。お互いコミュニケーションに分断があってはいけないということで。その中に長崎大学のながさき海援隊、普段から海ごみに取組んだり活動をしている彼らにファシリテーターとして入っていただきまして、それぞれのAグループからGグループに分かれてグループディスカッションを行なっていただきました。その発表の内容、結果として、7ページからまとめさせていただいています。まずAグループからの発表の内容は、ポスターを作ったりSNSで発信をしていく必要があるのではないかというご意見をいただきました。Bグループにつきましては、韓国の方が日本に来て海岸清掃をしたり、日本人が韓国に行って海岸清掃をする機会が増えたらいいというような発表をいただきました。Cグループの発表につきましては、観光客がポイ捨てをしないようにしたい。観光客にもプラスチック汚染に関する普及啓発活動をする。それから、韓国の大学生と対馬の高校生と一緒にみんなで清掃活動をして、海洋ごみを集め、再活用した商品と一緒に作ったり、海ごみアートの展示を行ない、海洋ごみの深刻さを伝えるようなことをやっていきたい。その中で、SNSということで、youtubeというプラットフォームの名前もでました。それからDグループの発表、対馬でのごみ拾いを日韓で行いたい。釜山でも日韓で海岸清掃を行い海をきれいに保つ。それから子どもたちにわかりやすいような絵本をつくりたい。それからEグループの発表では、プラスチック製品を減らし、目についたらごみを拾うというご意見がありました。Fグループの発表では、韓国と日本の海ごみを調査しデータを比較して、それを日韓それぞれのSNSや空港の館内放送など身近なものを通して知らせたい。それからこれもSNSのプラットフォームになりますがTikTokでごみに関するチャレンジ系動画を上げて一般の人にも意識を高めてもらいたい。それから最後のGグループの方で、韓国だけではなく色々な国の人と海岸清掃をしたいという意見がございました。ここ1、2年、コロナ禍でこういった状況になっておりまして、かろうじてオンラインの接続で会議を開くことができたんですが、やはりこういった状況においては、とにかく一緒に海岸清掃がしたいという意見、それは日本も韓国も思いは同じだというふうに感じました。それから、世代的なものもあると思うんですが、SNSの発信ということがしきりに出てきました。情報発信ということで、前の部分でも触れられておりますけれども、それがfacebookであったり、Instagramであったり、youtubeであったりTikTokであったり色々なやり方、コンテンツの作り方には違いはあると思うんですが、そういった発信を積極的にやっていきたいという意見をいただきました。資料3の説明については終わりたいと思います、

糸山委員長：はい、ありがとうございます。ただいまの説明について、何か質問等ござい

ませんか。

清野委員：オンラインで失礼します。今日のCAPP Aさんのお話で、次世代の対馬のこれからを担う方々に、自分で説明できるように色々な機会を作ったり、資料を作られたり本当に感銘を受けました。それでやっぱり未来を担う人たち同士でこの海ごみの問題というのは議論をしないと、なかなか展望が見えないというところがあるんですけども、対馬においてはこういう形で、韓国の先生が実際の色んなデータも含めてお話をしてくださるといふか、このデータも含めて開示していただけるということは信頼関係があつてのことかなと思いますし、対馬高校の皆さんが韓国語をこれだけ学んでいる方がいて、本気で韓国についてもきちんとした関心のもとアプローチされているのが伝わるので、一緒に清掃するとかそういうことも、いい展開になるんじゃないかなと思いました。これからの解決の中でやっぱりデータを基にどういうふうな解決をそれぞれ模索していくかという時に、捨うだけじゃなくてデータを基にということは大事になると思いますので、本当にいいステップを踏みながら若い方のそれだけの語学力とか映像発信力とかも含めて展開されてありがたく思いました。コメントですけども、以上です。

糸山委員長：はいどうもありがとうございました。他にありませんか。ちょっとじゃあ私から聞きましょう。ここに各グループでいわゆるグループの発表があつたというのが7ページから8ページにかけてありますが、このDグループの中で対馬でのごみ拾いを日韓で行なう、釜山でも日韓で海岸清掃を行ない海をきれいに保つと。こう書いてありますが、釜山で日韓で海岸清掃をやるということは、具体的にはやれているんですかね。ちょっと誰かご存じないですか。

運営（末永）：よろしいですか。日韓海ごみ交流ワークショップというのがありまして、ここ2年間は釜山の方に行けていない状況です。コロナ禍で交通の手段も遮断されている状態ということで行けていない状況なんですけど、その前の2年ぐらい前には、対馬の方から高校生が30名程度釜山の方に行って、海ごみ問題を共に話すということはさせていただきました。ただ、1月ぐらいだったということで、まず釜山海域といふか、近くの場合に海岸清掃する場所が確保できなかった。ごみがあんまりないっていうのが一つですね。それから、あと時期的に1月ということで非常に気候的にも海岸清掃するには厳しい状況であつたというのがありまして、海ごみの海岸清掃ということについてはまだ行なわれておりません。

糸山委員長：ちょっと、舍利倉さんすみません。釜山で日韓で海岸清掃をやる。例えば日本の高校生を30人なら30人送るといふ時にお金はどこから出るものなんですか。出ないものですか。

事務局（舍利倉）：お金は、この海岸漂着物対策推進事業、これは9割の補助をいただいて現場的なハードな回収から処理まで。発生抑制対策というような事業にも補助は使って良いということになっていまして、お金は国費9割をいただいて実施できている。平成13年から韓国の方が対馬に来て、海ごみの海岸清掃をしていただいていたのでやっぱり、来ていただくだけでは申し訳ないと。我々も日本のごみもやっぱり他国に流れ着いているということを考えて、我々も韓国の方に出向こうじゃないかというような意見も出てきて、平成30年からはじめて、実際は2年、3年と行けていないんですけど、30年と令和元年度と2回対馬の3校の高校生を連れて、実際、海岸の視察には行ったんですね。近くのパスでも行けるようなところでもやっぱり自治体の方で清掃話されていて、ほとんどごみは少なかったというような状況、やはり同じようにどこかで海岸清掃は行ないたいんですけど、そういった立地条件とか、言われましたように時期とそういったところがうまく噛み合えば、現実に行ってみたいという気持ちはあるんですけど。

糸山委員長：どうも、本当にありがとうございます。私も一度だけ釜山のある海岸で清掃が活動に従事したことあるんですけど、先ほどと同じようにほとんどごみがなかった。多分、時期にもよるんだろうなと思うんですが、対馬のごみと比べると圧倒的に少ないという、そういう気がしましてね。そんなに違うのかという気がしていたんですが。もしも釜山でも日韓で海岸清掃がやれるということであれば、何とか実現させていくという方向を作った方がいいなという気がしますね。他にございませんでしょうか。清野先生どうぞ。

清野委員：小島さん先にどうぞ。

小島委員：ありがとうございます。JEANも2002年ぐらいからずっと継続的に韓国の方々と海洋ごみ問題に共同して取り組むということで、お招きしたりこちらから伺ったりということで、たびたび現地に足を運んでおります。今回の資料の中にもちょっと出てきてますが、韓半島全体では西南海岸の黄海に面した海岸がごみの量が多いようです。私も何度か現地に伺った時にも、現地のNGOの方を通じて西南海地方の島嶼部とか、ごみのひどいところに連れて行っていただいたということがありました。そうなりますとやっぱり、韓国に行ってから移動の問題とか、滞在時間が長くなってしまうこととか、いろいろ解決すべき課題は出てくると思うんですが、実際に行き来が再開できるようになって、厳しいところを見たいとか、そこで一緒に活動したいということがあれば、韓国でも全土的な調査も行なっているNGOもありますし、必要であればJEANからそういったところに問い合わせをしたり、聞いてみたりお繋ぎするということができますので、必要な状況がございましたらおっしゃってください。以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。もしもそうなったら、先生のお力をお借

りしたいと思いますので、よろしく申し上げます。他にございませんか。

清野委員：小島さんからもお話があったように、こういう形で NGO の方々とか、私の方でも中山先生とかおっしゃった廃棄物の関係の団体での日韓の交流というのがあると思いますので、そういうセクターずつの交流というところから始まって、今度対馬でこの会議のようにセクターを越えていろんな人と議論しているので、さらに世代も越えてとってきていると思いますので、その動きで続けていくということと、もうちょっとそのデータがそれぞれ出てきているところをどう開示していくかといところも入ってきていると思いますので、この CAPP さんの発信の中でこういうことをやりましたという部分プラスデータとして埋めやすい部分を対馬として出して行って海外の機関もそういうものを持っているというのも実際にありますので、その関係がわかるといいかなと思います。実際にいろいろ海外のごみが多いということは、この九州の西側の北部の方ではいろいろ話題になるんですけど、自分達のものも向こうに漂着しているに違いないということは、結構日本人は気にしています。やっぱり自分達も向こうにご迷惑をかけているに違いないということが、ある意味もうちょっとソフトな意味で言ってくださった方がいいのかなと思うところがありますので、ぜひそういうことがフランクに話せるような間柄が色々と広がって行って、データをもとに解決することを期待したいし、そのためのステップを対馬で計画的に作っていったらどうかと思います。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。他にございませんか。よろしいですか。今から、10分ほど休憩をとります。

糸山委員長：では、休憩の後の議題に入りたいと思います。次は4番でございます。よろしく申し上げます。

運営（末永）：資料4、資料5というのがございまして、連動していますので資料4と資料5の1というのを連続でご報告させていただきます。資料4、対馬市海岸漂着物対策推進計画の評価表ということで、こちら以前からご出席の皆様ご存じだとは思いますが、A3の大きい紙にそれぞれの進捗状況を書いておりました。ただそれだと書けない分量になっておりますので、今年度からは協議会が第3回までありますので、3つに分けて、第1回の協議会ではその主要課題の海岸漂着物の回収処理体制ということで、体制づくりについて話をさせていただきました。それから第2回の協議会につきましては、主要課題として海岸漂着物対策に関わる行動計画、その中で回収処理という部分について皆様のご意見をいただきました。今回、今年度最後の協議会になりますが、第3回協議会につきましては議事進行のとおり発生抑制対策、これで普及啓発でありましたり、発生抑制対策でありましたり、最後の他の海ごみということで漂流ごみ、海底ごみ対策について触れていきたいと思いま

す。この部分の分割化したものが、今から紹介いたします資料5の(1)から資料5の(5)までになります。それぞれのメニューにつきまして、資料5(1)の説明の後にご意見を賜りたいと思います。その後も資料5(2)についてご意見を賜るといって、それぞれのメニューごとにお聞きしたいと考えております。それでは、資料5(1)をご覧ください。主要課題は発生抑制対策、普及啓発ということで、対策メニューといたしましては、活動方針でありましたり活動計画の策定ということを考えております。現状につきましては、平成29年度より漂着物のトランクミュージアム対馬版ということで、普及啓発活動を開始してまいりました。令和2年度におきましては、基本的にやはり新型コロナ等の影響でイベント等も減りまして、学校の方も休校とかもありましたので20件程度の実施でありましたが、令和3年度におきましては、現段階で30件、トランクミュージアムの貸し出しとそれから事業等の実施を行っております。この取り組みに対する課題といたしまして、低学年からの教育が重要だと考えておまして、まだ教育委員会との調整が不十分ではないかということと、後は大人への普及啓発広報の検討や前段階の教育ということも必要ではないか。それから以前、糸山委員長からもご指摘のありましたトランクミュージアムの授業内容はどうなっているのかということで、年齢に合わせた海ごみ授業の作成ということで、今現状でもその辺は、小学校、中学校、高校、社会人向けにそれぞれ分けてやっている状況ではあるんですけども、きっちりとしたマニュアルと申しますか、そういったものが作成途中でございまして、そういったものをきっちり各年代、それから海ごみの習熟度に合わせる授業の作成というのをやっていかななくてはいけないと思っております。それから、第2回の協議会で川口委員から出ました事前学習ですかね、対馬の海ごみについて海岸清掃をしたりする際に、そういった資料と申しますか誰でも対馬の海ごみの現場についてわかってもらうために、今後海ごみ情報センターにモニタリング調査の結果や海ごみについて学べる記事をアップして、それから対馬の海ごみについて学習したい人たちに必要な情報を提供していきたいと考えております。これにつきましては、現状既にまだまだ不十分ではありますが、動いておまして、対馬海ごみ情報センターのホームページに対馬の海ごみの情報でありますとか、それからペットボトルの状況でありますとか、具体的にそういったものを記事としてピックアップして掲載をさせていただいております。それから、こちら対馬市のホームページで私どもが受託運営をしておりますので、それとは別に対馬 CAPPА のホームページですとか後は対馬 CAPPА の SNS、facebook でありましたり Instagram でこういった活動状況でありますとか、そういったものを掲載していくことで情報の発信をさらに深めていきたいと考えております。資料5の(1)については、報告を終わります。

糸山委員長： すいません。ただいまの説明のとおりでございましてけれども、何かご質問等ございませぬでしょうか。このままでは基本的に質問はないかな。じゃあその続きをそのままやっていただきます。よろしくお願ひします。

運営（末永）：それでは引き続き資料5（2）についてご説明をさせていただきます。資料5（2）主要課題、発生抑制対策、普及啓発ということで、対策メニューといたしまして活動計画の実践の強化というものを行います。現状といたしましては、令和3年度から令和3年度対馬市海岸漂着物対策普及啓発活動計画に基づいて、普及啓発活動を実施している状況でございます。その普及啓発活動の状況というのが、次の2ページ目の表3の1、令和3年度のこの普及啓発のメニューと実施目標ということで具体的に書いているとは思いますが、これは先ほどの資料2の中で報告があったものでございます。それぞれ1から9まで書いてございまして、各メディアの媒体を活用した情報の発信、それから次がホームページにおける情報発信、海ごみ関連記事の作成ということで、実際、今年は2件の取材がございまして情報発信をしております。それからホームページにおきましては、月に1回必ずということで、12回ぐらいの更新を目標にしておりますが、今現在で21回、今年度は更新をしております。それから3のトランクミュージアムを活用した海ごみの授業ということで、目標件数を大体20件というふうに考えていたんですが、現在は修学旅行とそれから各小学校とかの授業とかも含めまして30件ほど今年度させていただいております。それから、先ほどちょっと話題になりました、対馬の方から韓国に行って海岸清掃することはないのかと糸山委員長からのご質問ありましたけれども、この日韓交流海ごみワークショップIN釜山というのが、実はその対馬から釜山に行って、ワークショップで向こうのほうで海ごみについて話し合うことなんですけれども、これはやっぱり最近ではコロナの影響でできていない状況です。それから次の5番目の日韓市民ビーチクリーンアップ、これは釜山外国語大学の方々が対馬に来て海岸清掃をしていただいて、その後ワークショップをするというような状態なんですけれども、こちらやはり韓国の方から今学生が来れない状態で、52人というのは、これはオンラインのワークショップの時の人数になります。それから次のボランティアの海岸清掃につきましては、今年度よりボランティアの受け入れということで対馬市の方からうちの方で業務として受けておまして、当初は10件ほどを目標にしておまして現状13件のボランティア受け入れをさせていただきました。ただし、コロナの状況で不特定多数に、例えば「みなさんボランティアをやるので集まってください」というような告知が今現在というのは、なかなかできない状況でございますので、そういったものにつきましては、各企業様単位とかです学校単位とかある程度その団体の、例えば仮に万が一コロナが発生した場合に特定できるというんですかね、感染者であったり濃厚接触者が特定できるような状態でその団体にお声がけをして呼んでいるような状況ですので、ちょっと人数的には少ないかなというふうに思います。ただ、このボランティアの清掃活動については、今年度中に連絡がございまして、企業様からなんですけど、山口にあります宇部興産という会社がございまして、来年度、今年ボランティア活動をしたいというお声がけをいただいております。それからもう1社、積水化学様、そちらの方からも企業として対馬で海岸清掃をしたいと、今年したいということで、去年の段階でご依頼をいただいております。それから、環境スタディツアーにつきましては今年度は10件ほどさせていただきました。これは修学旅行等

も含まれております。それから 8 番目の漁協での海ごみ対策の説明・協力要請ということで、今のところ漁協の各会議ですとかそういったことで今年度は説明をしたりとか、海ごみについての話をする事はなかったような状態です。今後はこちらそれぞれ漁協の大きい漁協、本所だけではなく、各対馬の浦々にはいろいろと支所であったり出張所であったり、小さな漁協の港ごとにそういった施設等がありますので、そういったところにも行ってそういった普及啓発であったり、お話ができればいいなど。そこまで全く行動ができていなかったということで、反省も含めてそういったところにも積極的に海ごみの普及啓発に行きたいと考えております。それから、イベントや会合等による海ごみの説明ということで、これは例えば対馬高校の授業でありますとか、そういったところで呼ばれて講演をしたりとかですね、そういったところでお話をさせていただいた回数、実施件数が書いてございます。で、実際にボランティアで目標とか、何件、何回しようとか、そういうことというのは、一見すると営業成績みたいな感じで複雑な感じもするんですけども、普及啓発活動は繰り返し実施することや、そういったことをどンドン CAPP 自身も含め、やっていくという意味では、色んなところにアンテナをはって、ボランティアの普及啓発活動であったり、ボランティア受け入れについて積極的にやっていこうという社内的な問題もありますけれども、そういった取り組みを鼓舞する意味では、こういった年間計画をきっちり立ててきっちりボランティアの海岸清掃を行ったりですとか、普及啓発をやっていくというのは大事ではないのかなと、待ちの姿勢ではなく積極的にこういった活動を続けていきたいと考えております。資料 5 の (2) の説明を終わります。

糸山委員長：はい、ご説明ありがとうございます。今の説明について、何かご質問等ございませんでしょうか。

犬東委員：イベントや会合等における海ごみの説明というところがありますけど、例えば、11 月と 12 月で農林水産祭等が対馬市で行なわれましたけど、そこにブース等を設けられて、一緒にごみのことを啓発したりすることができるように、ごみのクイズなんかを出されて、そして来場者には何か賞品が当たったり景品が当たったりして、楽しく学んでもらって一緒にお祭りイベントも盛り上げるというところはどうかと思いました。来場者数かなりお見えになっていたと思いますし、複数の方がおじいちゃんおばあちゃん、それから若い方、子どもさん、高校生、いろんな方が来場されていたので、そういう機会にされたらどうかと思いました。それから何点かあるんですけど、漁業者が、もっと関心を持つような仕組みづくりがあった方がいいんじゃないかなと思いました。この席でも結局漁業者、直接関係あるのは今私しか来てなくて、海ごみの問題って、海を走る漁船を持っている人だったり、遊漁船を持っている人だったりが一番日常的に目にする問題じゃないかと思うんですね。そこで、そういうことに携わっている人がこの会場に本当にいつもいないというのが、いつもいないということは結局無関心なのかなとか、呼ばれていないから来れ

ないのかという部分もあるとは思いますが、こういう会議とかでいろんな情報を聞けば聞くほど関心がそこに、私自身の個人的な意見ですけど関心を持つので気になる、海ごみのことが気になる。だから漁業者も色々こういう CAPPА さんだったりとか、漂着ごみのことだったり海ごみのことに関係を持たせてあげるとどんどん関心を持つと思うんですよ。無関心な人が SNS を通じて海ごみどうなってるんだろうかって言って探したり、漁業者が CAPPА さんのホームページ開いたりとかすることはまずないんじゃないかなと思います。だからこう、もっと関係を持つ仕組みづくりをされたらいいんじゃないかなと思ってます。それで、漁業者と関係を持つ時にその文書で、文字ばかり活字ばかりだったりすると漁業者ももう大半は眠気に襲われるんじゃないかなと思いますので、視覚で訴える、目で見せて訴えて、そしてそれがどんな影響があるんだよというところを何度も繰り返し判りやすくしてもらえるといいんじゃないかなと思うことがあるのと、そして私が個人的に小学校や中学校に磯焼けのことや食害魚の有効活用のごでゲストティーチャーで呼ばれている時に、必ず海ごみの話をするようにしてます。海ごみのことも中に入れ込んで子どもたちとか、生徒さんにその一人一人に当てて、巻き込んで「どう思う？」みたいなことを入れるようには話してます。ですから私自身ここに出席することですごく学んでも多いので、漁業者さんにも学ばせる機会？そして漁業の参事さんとか職員さんにも学ばせてもらえる機会を与えられたらいいかなと思っています。漁協の職員さんは、机上でする事務所内でする作業の方が多いため、現場のことがわからない人がいっぱいいます。この 2、3 日前にも漁業者との話の中で出たんですけど、自分達は、漁網が流れていたと、魚網をわざわざ回収に行ったと、何人かで行ったよという話をされている漁業者さんもいたしそういう人もいますので、そういうところも漁業者さんの中でこういう人もいますよって、こういう活動をされているところもありますよって。先ほど紹介された高校生とペットボトルを黒島に最初に行かれた、鴨居瀬とか小船越とか地区はすごく色々なことで海に対する愛情が深い地域ですので、そういうところの活動も漁業者に紹介されたらいいかでしょうかと思います。以上です。

糸山委員長：はい、ありがとうございます。今のことについて、上野さん、どうぞ。

事務局（上野）：ありがとうございます。いつも犬東さんのご意見には共感させてもらって感謝しているところなんですけど、私たちの課題もやっぱり海の仕事の人たちにどうやって入っていくかというのが島内でやる上では必ず、海の守り人の人たちとですね、どうやって関わっていくかは本当に大事な活動だと思っています。先日のその黒島の時も鴨居瀬の漁協のみなさんが一生懸命やってもらって、なかなか砂浜の方には行けなかったんですけども、どうしても連れて行きたいみたいな感じの人もいるぐらいに熱い方々がいらっしゃって、実際にその環境教育というか、高校生に知ってもらおうというのは、僕らよりも現地の人たちの熱さを感じたこともあって、今後はモニタリング調査とかそういうものも含んだ中

でも地先の人たちに手伝ってもらったりして、なるべくやってる目的をご理解いただいて、一緒に活動する形をやっていきたいと思っています。何より、今犬束さんがおっしゃったように、漂着ごみの関心が一番あるのは、海で活動されている漁師の方々と思ってますんで、こう巻き込みながらいうことで、先ほどの祭りとかなんかの漁業のブースの件も検討しながら進めていきたいと思っています。ありがとうございます。

糸山委員長：はい、ありがとうございます。ちょっと私もお聞きしておきたいんですけども、その漁業に従事しておられる方が、こういう書いた物を読むというようなのは、非常にやっぱり抵抗を感じるだろうというお話がありましたけども、その意味で言うところのこのスライド等で見せた方がいいんじゃないかと、そういう話ですね。いや、僕はスライドで見せても本当は同じではないかと気がしてるんです。今の話だと。本当は、フリーでディスカッションするのが一番いいんじゃないかという気がしてるんです。で、議題を明確にしておいて、そこで議論できるような格好にしていかないと、多分ここでスライドを見せて、それで説明してそれで終わりというんでは、結局は興味が持てないんじゃないのかという気が若干していますけども、どうなんですか。

犬束委員：あの文字や活字が得意な方もいらっしゃると思うんですよ、中にはですね。ただ委員長が言われるように、口から意見を言うことによって、そこで自分が言ったことだから記憶に残るし、それはすごく素晴らしいと思っています。そういう体験をさせてあげることも必要じゃないかなと。

糸山委員長：だから意見を言えるような場を作ると言うことが一つでしょうかね。

犬束委員：そうです。柔らかい雰囲気とか言いやすい雰囲気を、間違ったことも言ってもいいんだよって、固くならなくてもいいんだよというそう言う場を設けてもらったらいいと思います。

糸山委員長：それから、もう一つ。イベントへの参加、これについては何かありますか。

運営（末永）：はい、先ほど弊社、上野から話がありましたとおり、イベントにはぜひ参加をしたいと思っています。というのがよく言われるんですけど、さっき犬束委員がおっしゃったように CAPP のホームページとか、海ごみの問題を調べる人とか興味がある人が調べるんですよ。実際、興味がない人は調べないし、見ないから分からないので、例えばそういったことに興味がない人、不特定多数の人が海ごみじゃないことに集まっている中で僕らがそう言った発信をさせていただいたりとか、今運営させていただいているトラックミュージアムを展示するだけでもインパクトがあると思いますし、そういったところで僕

らが色々と話ができるチャンスというか機会をいただければ、それこそ発生抑制については効果的ではないかと思しますので、ぜひ参加させていただきたいなと思います。

糸山委員長：よろしいでしょうか。他にございませんか。

中山委員：大変丁寧に説明していただきありがとうございました。色んな取り組みの実施回数とかこういう非常にコロナで厳しい中で、着実にイベント実施されて難しいところはもちろんあるんですけども、かなりの数の方が参加していただいているのは、非常に感心しました。それでこういう回数とか参加者数の目標というのは、私も非常に重要だと思っておりますので、ぜひ今後も、こういう目標を立ててそれを評価していくという取り組みはぜひ継続していただきたいと思っております。もう一方ですね、こういう回数とか参加者数みたいな量的な指標だけでなく、質的評価、例えば参加した人が今回スタディツアーとか、勉強会とかをどういうふうに評価したのか、どういう感想を持っているのかというのはおそらく各回でそのアンケート調査とかされてると思うんですけども、その結果を、こういった委員会の場で紹介していただき、質的な評価の参考になるような資料をご提示いただき、そこからまた今後の方針が拾えるような形にさせていただけたらいいなと思います。特に今後漁業者の方との取り組みを進めていく場合には、ぜひそういう部分についても検討をいただきたいと思えますし、通常行なっているスタディツアーとか、ビーチクリーンのような取り組みの中でも参加した人がどういう評価をするのか、このイベントを評価したのかということを見せていただくとありがたいなと思います。ちょっと手間がかかるので申し訳ないところではあるんですけども、ぜひその辺もよろしく願いいたします。

糸山委員長：はい、ありがとうございます。これはどなたに聞くのがいいのかな。対馬市役所に聞けばいいのかな。

運営（松井）：CAPPA で大丈夫です。

糸山委員長：CAPPA でいいですか。

運営（末永）：はい。

糸山委員長：CAPPA で今の質問に。色んな参加の仕方があるのだと思いますけれども、今のようなアンケートが取れているのかどうか、教えてください。

運営（上野）：ありがとうございます。アンケートとしては、中山先生に言われてそうだなと思ったのですが、感想のお手紙等はいただくのですが、今後は生徒たちとか先生方の評価、

あるいは漁業者さんの評価を、言われた感じでお聞きしながらあるいは活動を続けていこうと、今先生にご指導いただいて思いました。ありがとうございます。

糸山委員長：ありがとうございます。他にありませんか。

運営（末永）：そうですね、今のことに付随しましてお手紙、お礼状というのはかなりいただいているんですね。こちらから積極的に、やったイベントに対する質の評価についてはいただいていたというのがあります、これはうちにとりましても非常に有効なデータになると思いますし、うちの環境スタディツアーをさらに良いものにするためには必要なものだと考えていますので、早速その部分につきましては今後実施して、協議会の場でその数字を公表させていただければと思います。

糸山委員長：ありがとうございます。先ほどの話でも、企業の方からも参加があるのだという話もありましたから、そういうところの感想みたいなものをきちんと聞けたらいいのかなという気がします。とにかく質の評価をやるということは、非常に大きいのかなという気がしておりますので、よろしくお願ひしたいと思います。私の方から、一つだけどうしても聞きたいことがあるので、ちょっと教えてください。この冊子の何ページになりますかね。ちょっとお待ちください。

運営（末永）：参考資料5です。

糸山委員長：参考資料5の5ですか。

運営（末永）：はい。

糸山委員長：ずっとスライドが載せてあるのですが、このスライドについてちょっと説明をしていただけませんか。正直言って、見まして、素晴らしいスライドだなというふうにしたものですから、ちょっと良かったら説明してください。お願いします。

運営（末永）：はい。このスライドは、11月7日に行われました日韓ビーチクリーンアップのワークショップの中でチェ・ギュチョン先生に発表をしていただいた時のスライドです。実は、先生と私の方が壱岐の方でもお会いすることができましてすごく判りやすい内容の講演をいただいた時に、「機会があったら対馬にぜひ来てください。」とお話をしまして、たまたまご縁で、今回は対馬のこの事業に ZOOM で参加していただくことができました。それで、先生の方には許可をとりまして、内容が長い資料ではありますが、触れることはできないのですけれども、あとで委員の皆さまにじっくり読んでいただきたいと思いまし

て、参考資料として添付をさせていただいています。これは、世界の海ごみについての大体概要でありますとか、それからマイクロプラスチックの問題の話でありますとか、あとは韓国内部の海洋ごみの74%が中国のごみであるとか、そういった韓国の情報+世界的な海洋問題、海ごみ問題について取り上げておりましたので、添付をさせていただきました。以上です。

糸山委員長：先ほど、休みの時間に少しこれを見てみまして、本当に良く書いてあると思います。その意味で、これと同じようなスライドがこの委員会でも作れたらいいなと思ったのが、今の質問のそもそもの動機でございます。そういうものができるのを将来的には楽しみにしながら。もう一つ、ちょっとこれは、どなたか教えていただきたいのですが。対馬に流れ着いてくるようなごみというのが、将来的にずっと流れ着いていくんでしょうが、その先どんなふうになっているかっていうことは誰かご存じないでしょうか。対馬に流れ着いた。それから対馬からまた離れてどこかに流れて行って、場合によっては壱岐に流れ着いて。壱岐の方から九州の方に流れ着くのもあるだろうし。そのまま日本海を北上するのもあるだろうし。日本の海岸に流れ着いたものが将来的にどうなるのか、そこらを何か皆さんご存じの方いらっしゃいませんか。良かったら教えていただきたいのですけれども。

運営（松井）：糸山先生、清野先生が別の質問だそうです。

糸山委員長：どうぞ。

清野副委員長：先ほど話題になってましたアンケートの結果の分析の話なのですけれども、これは実践をやる中で、内容をどういうふうに評価するかって一つ重要な分野になっておりまして、教育とか実践、展示それからイベントなどで、特に実務の関係の中で研究として確立してこうというようなことが始まっております。それでこれから、対馬での色んなクリーンアップのイベントだとか、そういうものについてアンケートを作られるかと思いますので、ぜひ中山先生とか私も今大学の授業の評価で色んな質問したりとか、それを解析したり逆にされたり、そういう中で、どうしたらそれを効果的に質問項目を組み立てることができるかなどもありますので、ぜひ実施前に、ご一緒にアンケートを作れたり、解析できるといいかなというふうに思っておりました。大学の学生実習で、ビーチクリーンとかに連れてった時もまた同じ問題で、拾って終わりっていうのではなく、どの部分に学生が興味を持ったのかとかそこが大事になってくると思います。それが、コメントとそれからのご提案となります。糸山委員長の今のご質問のことも私の知りえる範囲というか、そういうことでお話しします。また、小島さんもいろいろ情報を持っておられると思います。実際その対馬で、これだけ労力をかけて拾っていて、もし拾わなかったらどうなるかっていうことは、再漂流であるとかあるいは堆積し過ぎて、対馬のその中で、生態系への影響があるだとか、そういう問題があるかと思いますが、再漂流については、いくつかそういった定点カメラの画像か

らの解析だとか、あるいは数字計算によっても事例があるかと思います。ただ、それがどのくらいどこまで流れていくのかっていうのは、実際対馬から再漂流してロシアの方に行ったりあるいは、周辺の浮いているごみとまた一緒になって同じようなプロセスになったりすることがありますので、そういう意味では再漂流させないっていうこと自体が凄く重要なことになってくると思います。つまり、来た分だけをどんどん取ることで再漂流するもの削減しているということも言えるかと思います。日本海は、ご存じのように一度入ったらなかなか抜けないっていう状態になっている内海ですので、そういう点では対馬が入口のところでこれだけ取っているっていうことについての評価というのを（以下機器不具合の為聞き取り不可）以上です。

糸山委員長：はい。どうもありがとうございます。今の誰か答えられるのかな。

運営（末永）：データの解析の部分につきましては、CAPPA でとりましたアンケートとかそういったものを正確にデータをとってその辺の解析だったり、考察につきましては先生方のお力をお借りしたいと思いますので、送りましたデータ等はきっちり共有させていただきますので、ご指導をよろしく願いしておきます。

清野副委員長：ありがとうございます。大学でも、ビーチクリーン結構実習の中にも入れてきたのですが、そういう意味でもいろいろ対馬でのご経験も導入しながら、伝え方など工夫していきたいと思いますので、どうぞよろしく願います。

糸山委員長：他にありませんか。よろしいでしょうか。はい、資料5(3)。

運営（末永）：資料5(3)について、ご説明させていただきます。これも、発生抑制対策の部分で対馬島内での発生抑制対策ということで、内容ポイ捨て・不法投棄の対策およびそれらの防止の呼びかけということ。現状といたしまして、道路等でのポイ捨ては多数不法投棄に関する普及啓発はちょっとまだ足りてないのではないかと思います。CAPPA では、平成31年より島内の団体と月1回ですね、海岸清掃ではなくて厳原の主に城下町の清掃等を行っておりましたが、最近はなかなかコロナの状況で不特定多数に呼びかけっていうのができずに、実施されておられません。それから、2ページ目の方で取り組みの経緯といたしまして、平成30年度に対馬市の方で不法投棄のパトロールというのが始まったと聞いております。今の現状というのが、対馬の最後の行動計画への記載というところに記してあるのですが、海岸漂着ごみの中には海外製品ばかりではなく、日本のごみも一定割合占めています。もちろん、こういったごみっていうのが沖縄・九州地方から海流等に乗って漂着したとも考えられるのですが、明らかに対馬島内から発生したごみが漂着しているっていうケースも見えます。特に、対馬島内では道路脇とか国道沿いとかに結構缶とかペットボトルがポイ捨て

てされてるようなエリアがありまして、そういったところに大雨とかが降った後に、そのまま川とか用水路に流れて、海に流れてきているのではないかと考えられるようなごみがたくさんあります。やっぱり、対馬も今現状コロナでまだ観光客とかはそんなに多くはないのですが、今後 Ghost of Tsushima であったり、あと韓国との行き来が再開した場合とかに含めて、非常に美しい海っていう、漁業であるとかそういった部分。それから、守っていくっていう美しい海という以外に、観光の資源としての海っていうか、そういったものも美しく保っていかないといけないなと考えておりまして、やはり島内の不法投棄やポイ捨ての削減に向けて、私どもも海のごみに取り組んでいる団体でもありますけれども、そういったところも実際に普及啓発活動をもっと推進していきたいと考えております。この部分の説明は以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございました。ただいまのところで、何か質問等ございませんか。レジ袋有料化、エコバッグの問題、不法投棄パトロールの問題、ポイ捨て禁止の看板といったような問題がありましたけれども。私一つだけ全員に言いたいのですけれども、海ごみのことをやるといつも出てくるのですが、例えば対馬で海ごみの清掃活動をやった時に、「韓国のごみが多いよ。」とか「中国のごみが多いよ。」というような話が出てきます。基本的に日本のごみがあんまり出てこない、これがだんだん拡大しまして、プラスチックごみだとかそういうことになった時に、日本の責任はほとんどないような認識に捉われがちだと。「韓国や中国が悪いのだ。」と、そういうデータが出かねないということを十分注意しておく必要があるのだと思います。それこそ、我々も本当は加害者の一人なのだ。だから、自分でポイ捨てをしない。そういうふうなところに、きちんともっていかないとこういうごみの問題というのはなおらないだろうなという気はしています。皆さん、他にございませんか。よろしいでしょうか。

小島委員：小島です。

糸山委員長：はい、どうぞ。

小島委員：今委員長がおっしゃったこととも重なることがございますが、実際に対馬の市街地道路等でポイ捨てと思われるごみが散見されるという状況、私も承知をしているのですけれども、もう一つごみの発生っていうことは誰もが当事者であるということと同時に、ポイ捨てばかりが散乱の原因ではなくて、管理が不十分とか捨てたつもりがないのに、意図しないで結果的にごみとして散らかってしまっているものというのも相当数あると思われます。市街地のごみとしてあわせて考える時に、みんなが当事者で「自分も出している可能性があるよ。」ということの啓発を合わせてやっていくということが重要だと思います。

糸山委員長：はい、本当にそのとおりだと思いますね。他にございませんか。よろしいでしょうか。

清野副委員長：すいません。一つだけ。今の小島委員のお話で私もあらためて思ったのですが、ポイ捨て以外に、捨てたはずが、管理がどこかでやっぱり上手くいってなくて、漏れ出ているもののごみについては最近いろいろ研究とか調査が進んでいるところです。対馬内部からの海ごみをいかに減らすかっていうことが大事になりますので、一度そういうポイントになるような場所について、ごみのホットスポットであるような場所をどういうふうに洗い出すかっていうことも、来年度に向けて大事な内容かと思っておりますので、調査の方法とか視点とかも事務局の皆さんとも、ご相談していきたいと思っています。いくつかパターンがあるようなのが全国で見えてきましたので、そういうところを集中して見てみて、対馬の場合はどうかというのを確認するという作業ができるかと思っております。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。他にありませんか。よろしいですか。

中山委員：中山です。

糸山委員長：はい、どうぞ。

中山委員：今のお話とも関連するのですけれども、ポイ捨てっていうのはもちろんペットボトルとかビニール袋とかそういった生活関連のものを意識して書かれていると思うのですが、実際にはどういうふうに詰めていっていかってというのは、難しいところがあると思うのですが、実際には事業者のポイ捨てとかもあります。それで、普通不法投棄っていうと建設業とかが今まで多かったのですが、プラスチックの問題については漁業関連の人ってもちろん被害者でもあるのですが、その加害者にもなりうる面があるということで、国としても海ごみ対策のアクションプランの中に、漁業関連の漁具とかの適正処理っていうのは、非常に重要な一つの目標になっていて事業者団体を通じて、ちゃんと適正管理がなされるように今後取組みを強化していくっていう目標が立っています。そういった意味では、先ほどの漁業者との対話っていうのがありまして、実際に対話する時は漁業関連で「韓国から流れてくるごみにどういうふうに対応しましょうか。」ってそういう話を中心になってくると思うのですが、その中で「自分たちが使っている漁具等を、ちゃんと自分たちはきちんと処理できますよ。」というところも含めて、検討をしていただければなと思います。以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。自分がやらなければいけないことと、他の人に協力していただかなければならないっていうところがあるということ、きちんとわきまえてやっていくということだと思いますけれども。他にございませんか。よろしいで

すか。はい、では次にいきたいと思います。

運営（末永）：資料5（4）についてご説明させていただきます。これも、発生抑制対策の中で韓国等との協働の進展ということで、内容として情報の共有、対策の立案、県・国との連携ということで、現状ですね、今まで関連した取組みというので日韓市民ビーチクリーンアップ、今回は、海岸清掃はなくオンラインのワークショップのみの開催となっております。それから、先ほど出ました日韓交流海ごみワークショップ IN 釜山につきましても、こちらでも交流がちょっと今、2年ほどできていないような状態になっております。資料3で、説明させていただきました、現状として11月7日に日韓市民ビーチクリーンアップオンラインワークショップを対馬で開催しました。その中で、釜山外国語大学、対馬高校、豊玉高校、それから今回は長崎大学のながさき海援隊の学生が参加をして、日韓の交流をすることができたというか、かろうじてですね、日韓で交わるつながりを維持することができたと考えております。それから、今の課題といたしましては、韓国とはそういった形でオンラインということでギリギリではありますが、連携を続けているような状況ですけれども。日韓ビーチクリーンアップのようなイベントを、中国の学生とも開催をするということで、前回の第2回の協議会の中でも、その辺のところはいろいろと日韓の問題以外に、対馬と中国との取組みとかですね、その辺のところ議題になったと思うのですが、そういったところも前回ご来場いただいていた、二宮組合長の方からも漁業者として中国の団体とも話をしたいというようなご意見もいただいております、対馬市の二宮部長より観光交流商工部というところがあって、そこら辺にお話をしたら例えば視察ツアーであったり、いろんな力もお貸しいただけるのではないかとというようなご意見も賜っておりますので、中国の方につきましても今後諦めずに、何かしら方法を考えていきたい、検討をしていきたいと、皆さんと協力しながらやっていきたいと考えております。最近の進展状況といたしまして、何度も申し上げますが、日韓市民ビーチクリーンアップのオンラインワークショップを開催しました。その中で、以前の中で出た韓国の方は大学の生徒さんで、対馬の方は高校生ということで、ちょっとバランスとかも考えて、大学生も日本の方からも出した方がいいのではないかとというようなご意見を、以前の協議会で賜っております、今回はいろいろとですね、対馬以外の壱岐で会ったりとか五島で会ったりとか、そういったところで海ごみのイベントで一緒になっていました、ながさき海援隊の方に声を掛けさせていただきました。海援隊の皆さんも対馬ではですね、海岸清掃をしていなかったということがありまして、快く引受けていただいて実際海岸清掃にも来ていただきましたし、今回のその流れでオンラインワークショップについても、協力していただきましたので今後とも、来年も含めて長崎大学のながさき海援隊とは、密に連携を取り合って海岸清掃であったり、海ごみのイベントはやっていきたいと考えております。それから、今前に盾があるのですけれども。これがですね、公募展で「日韓私の友人、私の隣人を紹介します」という、弊社の、いろんなイベントで協力していただいているソン・ハンビ君という韓国の青年がおりまして、私どもの海ごみの

活動の報告であったり、自分が対馬で取組んだことについて、韓国の公募展に募集をしましてその取組みが受賞をして、表彰されたんですね。この表彰先が、大韓国外交部公共文化外交局長の表彰ということで、賞をいただきました。もちろん、賞を得たからどうのということではないのですけれども、私どもの活動とかがそういった意味で、韓国の方でも評価をされたのではないかと、形として、こうやっていただけたということ。今後も、そういった意味で日韓関係でさらに深く、関係が保てるようにということで精進したいと思っております。次の2ページ目を見ていただきたいのですけれども、取組みの経緯ということでずっと平成15年度から取組み日韓ビーチクリーンアップ等を行っているということで、表になっているとは思いますが、平成30年度、平成31年度まではそれぞれずっと色々と活動の内容があったのが、令和元年になって、コロナということで活動が凄く少なくなっているという状況です。令和2年度、令和3年度を見ていただいて、ほとんど令和2年度に関してはオンラインワークショップさえも中止になってしまったというようなことで、令和3年度でなんとかこういった日韓のイベントができたということは、良かったかなと思っております。ただ、今後は次の年度も引き続き、もちろんコロナという状況も踏まえてではありますけれども、希望を捨てずに交流というものに関しては、韓国、中国も含めて取組んでいきたいと考えております。説明以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。今のところで、何かご質問等ございませんか。ないようでしたら、その次にいきたいと思っておりますがよろしいでしょうか。はい、じゃあその次いきましょう。

運営（末永）：引き続き、資料5（5）を説明させていただきます。これは、最後ですね、その他のごみということで、漂流ごみ・海底ごみ対策ということでありまして、現状につきましては漂流ごみについては対馬海上保安部様に対応していただいているというのが現状です。実は今日この部分に関しては対馬海上保安部の方にご説明をいただく予定だったのですけれども、オミクロンの状況で海上保安部の方からこの会議には出席ができないということで部内で決まったとご連絡をいただきました。海上保安部さんの方から作っていただいた資料がございまして、それについて説明をさせていただきたいと思っております。海上保安部からの資料ということで、急遽なのですが、いただいた部分なのですけれども、1ページ目は、海上保安部のこういったことをやっているかという概要等が書かれておりまして、2ページ目にも活動の内容というのが書かれております。最後のページですね、2021年に対応した漂流物、主なものということで、海上保安部さんが2021年に対応した漂流物についての報告をいただきました。まず、2021年の6月7日に黄色のブイというのを、ハンゲル表記のものを対馬の北部の方で回収されたということで。次に、6月9日に対馬の中部ぐらいで漁網を回収された。それから、7月10日に竹の集まりみたいなものを、これは豆殻の先の方、南の端の方で回収された。それから、4つ目が8月25日これはかなり対馬からは

ちょっと離れているのですが、6月に沖縄で発生した海難漁船を回収されたと。8月30日、長さ10mの鉄パイプを、これも対馬から離れた場所で回収されています。6個目が、10月26日、これは対馬の南の方なのですが、生け簀のようなものを回収されています。それから、12月9日対馬の中部ぐらいですね、浅茅湾ぐらいのところでは救命ボート、12月3日九州島東方で沈没した中国漁船の救命ボートを回収されているという報告を受けております。見る感じだと、この漂流ごみというのはかなり大きめのごみをやはり海上保安部の方は船舶の走行等で危険がないようにということで、回収をされていると思います。それから、実際今、私どもが漂流ごみを実際拾っているわけではありませぬので、今回このような形で海上保安部の方に、情報の提供をお願いいたしました。本来であれば、詳しい現場の生の声ということで、保安部の方に今回ご説明していただく予定だったのですが、こういう状況になりまして、ちょっとご説明いただけなかったということで、また次回機会がありましたら、この部分につきましては詳しいご説明等を依頼したいと思います。課題として、漂流ごみや海底ごみ自体何も判っていないというのが、正直なところですよ。私どもの方も、特に海底ごみについてどういったことがってことは、何も判っておりませぬ。ただ、今進んでるものとして、参考資料2につけてあるのですが「海の次世代モビリティ利活用に関する実証実験」ということで、これは長崎大学の山本研究室工学部が国土交通省の予算を使って、この実証実験というのをやっております。この実証実験で、ASV・ROVと書いてありますが、ASVというのは、自律船といいまして自動で動く船を指します。ROVというのは、その船に搭載されたドローンですね。これは、空中を飛ぶ、空を飛ぶドローンではなくて、海中探査をするドローンということになります。実際、じゃあこれがどうなっているかといいますと、自律船で、将来的には自動で運転をして対馬の海岸をぐるっと回って、その搭載されたカメラで海岸線の写真を全部撮って、対馬の海ごみ状況を把握する。その把握する時には、GPSとかとデータと連動してポイントがきちり正確に判って、そこを定点観測することができる。それから、ROVというのは海中に入って海底ごみを自動で探査して戻ってくるシステムということですよ。実際に、海底ごみを調べるということで一つは阿連の漁協付近、久須保の先の三浦湾の部分の漁礁ですね。犬束委員のご主人の方で入れられていた、流木を使った漁礁。その辺のところを海底を操作したりする実験を行ったのですけれども、私どももオペレーターとして参加させていただいたのですけれども、実際には海底ごみは見つけることができませんでした。漂着ごみが結構多い場所の海底には、ごみがなかったです。ただ、2地点だけでは何とも言えないのですけれども、漂着しているごみのすぐ近くの海底にはごみは存在しなかったのです。これも2地点以外に他の地点も調べて今後見ていきたいなと思っております。実は、海底ごみを取るというのもその実証実験の一つの成果の必要性がありますので、今回、1月22日、23日の土日で厳原の港付近の海底のごみのチェックをする予定です。多分、港付近だったらごみがあるのではないかということで、そこら辺をまた調査したいと大学の山本研究室の方はおっしゃっておりまして、私どもは実際にこの技術というのが実用化されれば、対馬で利用したいというような形でお願いはしておりますけれども、

やはりなかなか通信環境の問題でありますとか、まだまだすぐに、この技術が実現するというふうには、正直いろいろ改善する余地はいっぱいあるのかなと思っておりませんが、そういった取組みがありますので、それについてはご説明をさせていただきました。資料5の説明は以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございました。ただいまの報告について、何かご質問等ございませんか。よろしいでしょうか。はい、どうぞ。

清野副委員長：清野です。海上保安庁さんの報告の漂流ごみの話がございました。それで、対馬の漁業者の方が海ごみの問題に、相当切実に感じていらっしゃるの一つとして、やはり近海にごみが多くて漁船の操業の時に、プロペラに絡まったり相当怖い思いをされたりってところの話は、漁協さんに伺うたびによくあります。結局、自分たちの安全の問題もあってやっぱり海ごみを何とかしないとイケないという気持ちは、基本的には持っていらっしゃると思います。ですから、洋上でどういうトラブルになっていて、危険にさらされることが多いのかって話も、もうちょっとデータとして漂流ごみの方もとっておくといいいのかなと思います。それから、阿連の巨大な海底ごみの山が以前あって、どういうふうに除去するかっていうこととかも検討されててなかなか実現が大変というか、コスト問題があるということがございました。そこを、そのまま放置していくとゴーストフィッシングが続くのではないかっていうことは、漁師さんもおっしゃっていたので基本的には海底とか漂流とかいうところに、漁師さん自らの問題として、取組んでいただくということが何とかそういう状況になるといいのかなと思ってます。今日議論になりましたように、水産系・漁業系のごみどうするかってのはなかなかの立場が難しいとか、よその内部あるいは漁業関係の内部でもそれは対馬に限らずどこでもいろんな意見があったり、身内からのいろんな意見があったりするんで、そういう丁寧にやっていくかってことだと思います。つまり、被害者になってしまっている部分の安全の問題もをっともっと、ぜひその部分上手く進められればと思います。対馬の漁業者の方も含めて、会話ができる日本でも貴重な場になっていきますので、そのあたり今年は進められればとあらためて思うところです。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。今のは何か答えることがありますか。大丈夫ですね。

中山委員：中山です。

糸山委員長：はい、どうぞ。

中山委員：長崎大学の非常に貴重な情報ご提供いただいて、ありがとうございました。我々

も河川のマイクロプラスチックが沈んで、低湿にどのぐらい生えているかっていうのを調査したりしているのですけれども、基本的に重たいプラスチックってそんなに移動しないので、浮遊性のマイクロプラスチックがたくさんあるところに、沈降性のマイクロプラスチックがたくさん沈んでいるかっていうと、そういうわけではないのですよね。浮遊性のものは、遠くから運ばれてくるので海岸とかにありますけれども、沈むやつはすぐ沈んでそんなに川では流されて移動するのですけれども、一回沈んでしまうとなかなか遠くまで移動しないような感じを受けていまして、仮に今調査しているところが港でしたっけ。河川の流れ込みとかだったらあるかもしれませんけれども、浮遊性のものがあるところに沈降性のものがあるとは必ずしもなないのではないかと思いました。特に、委員会の検討事項の趣旨とはちょっと逸れますけれども、私の個人的な意見はそんな風に思っています。以上です。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。海底と言いますか、海の中のごみに関してはもう少しデータを積み上げてから、議論ができたらいいいのかなと思いますので、そうしましょう。他には、ございませんか。よろしいですか。それでは、その次は4になりますか。全体を通じての質疑応答ということですがけれども、何かございませんか。はい、ではないようでしたらその次の5番その他連絡事項等ですがけれども。

事務局（安藤）：特段ありませんので。

糸山委員長：CAPPA からもないですか。なんか連絡は。

運営（末永）：特に連絡事項等はないのですが、代表何か最後に。

運営（上野）：今日も貴重なご意見ありがとうございます。先ほどの海底ごみに関してなのですけれども、モニタリング調査する時に、ペットボトルほとんどキャップがついているペットボトルばかりで、キャップがついてないペットボトルはほとんどないのですよね。キャップは結構見つかるのですよね。キャップだけというのは。恐らく、さっきのタンクと違ってペットボトルは満タンにすると沈んでしまいます。いつも、シーカヤックで行っている無人島付近は、シュノーケリングするのですけれども、そこは全然海底ごみがなくて、どこかに沈んでいるのではないかと僕自身思っているのですけれども。いろんな問題があって、今度調査する時も CAPPA 独自でキャップの数とか、キャップがついてないペットボトル、どれぐらいの差があって、もしかしたらどこかに韓国の近くに沈んでいるか、それが対馬のペットボトルでしたら、対馬の近くに沈んでいる可能性もあるのですけれども。あと、缶に関しては全て日本のキャップなしのいわゆる普通のカパツと開けるあれは、ほとんど日本製なので缶は漂流しなくて近くに沈んでいる可能性もあるので。そういうのを僕らも調べながら、そういうことを今までやってなかったのですけれども、今後はそういうのにも注意し

ながら、ちょうど意志的にも海流の議論から入口にありますので、細かいとこまで調査しながら CAPP 独自の今までやっているモニタリングと違って、そういうのを意識しながら今後もやっていこうと考えていますので、今後ともよろしく願いいたします。

糸山委員長：はい、どうもありがとうございます。とにかく、海岸の漂着ごみとともに海の中のごみのありようと言いますか、そういったものについて少しずつ我々のデータを増やしていくとか、そういうことをしていく必要があるのではあるかと思えます。先ほど言いました、一番最後の韓国の大学の先生がおやりになっている、海の中のプラスチックごみというものはほとんどないと言っておられますので、実際どれが正しいのかというのはもう少しデータを積み重ねて、お互いで議論し合っていくということが必要なのかなという気がします。とにかく、こういう海岸漂着ごみも含めて皆さんと色々なデータをつき合わせながら、データ議論をしていけたらいいのかなと。そうすると、我々の判らなかったこともだんだん判ってくるし、それに対する対応策も見つかるのではないかという気がしますので、どうぞ皆さんよろしく願いをしたいと思えます。あとは、言うことないですね。それでは、これで今日の会議を終わりたいと思えます。どうも、ありがとうございました。